カトリック高松教区報

２０１３年７月７日（第１５５号）
発行所　カトリック高松司教区　広報委員会
〒760-0074　高松市桜町1-8-9
TEL 087-831-6659　FAX 087-833-1484
Email
教区：catholic-takamatsu@takamatsu.catholic.ne.jp
広報：tk-koho@mxi.netwave.or.jp
生涯養成：　yousei@takamatsu.catholic.ne.jp
WEB:/www.takamatsu.catholic.ne.jp/

マザー・テレサの言葉

パンの形の中に
キリストを見るように
努めながら、
私たちは一日を始めます。
日中は、貧しい人々
の疲れた体の中におら
れるキリストに出会う
ために出かけます

テーマ「キリストとの出会い」

信仰共同体養成プログラム決まる

高松教区の２０１３年度目標は、先の司教教書にもあるように「信仰共同体の養成に取り組む」ことである。高松教区の歩みを振り返り、「信仰養成」に関して「今、わたしたちはどこにいるのか？」を確認し、更なる宣教共同体への成長を目指している。

第２バチカン公会議とＮＩＣＥを経て、日本の教会は閉ざされた教会といったイメージや、信仰と生活の遊離の現実を反省し、社会に開かれた教会と私、みことばと私、という信仰のありようや、共に生きる共同体となるための動きが始まった。これは溝部司教が『高松教区の問題は何であったのか』（カトリック新聞・２０１１年４１３４号）に書かれたように「それは第２バチカン公会議の線に沿って日本の教会の方向性を定めた福音宣教推進全国会議（ＮＩＣＥ）の路線に高松教区が余りにも無関心、または無知だったことに起因する」との指摘に応える動きとなります。

２０１２年10月から信仰年に入り、この1年間、信仰の目で神とかかわり、神の恵みと助けによって信仰のありようを確認するために「教区民の集い」では信徒各自の「ダイナミックメモリー」を分かち合った。今年２０１３年は「信仰共同体」を柱に置き、互いの信仰の上に立ち、みことばを分かち合うことから始めようとしている。

今後、３月の（拡大）宣教司牧評議会で確認したように、メインテーマを「キリストとの出会い」とし、左記の手順で具体的行動に移そうとしている。

イ・11月までは「7ステップ」方式による聖書の分かち合いを、小教区・ブロック毎に実践していく。これを通して聖書の分かち合いのためのファシリテーター育成にも繋げていく。

ロ・２０１４年は設定された具体的な養成項目に沿って信徒養成に取り組む。「養成項目」案・①交わりの教会論（第２バチカン公会議の意義）②秘跡を生きる教会（洗礼を生きる・ミサを生きる）③教会運営（評議会の在り方等）。

ハ・２０１５年は「養成チーム」を編成し「信徒の奉仕職」の実現に向けて取り組む。

高松教区設立50周年記念感謝と希望の集い

テーマ　感謝と希望

キャッチフレーズ「ともに歩こう　希望のうちに」

2013年11月4日（月）振替休日
場所　カテドラル　桜町教会　四国会館
時間　午後1時～4時

バチカン教皇大使、お世話になった司教様、司祭修道者の皆さまをお招きし、希望のうちに感謝と賛美を捧げる集いです。どうぞご参加ください。

内容　第1部　感謝の部　（愛媛地区）
希望の部　（香川地区）
賛美の部　（高知地区）
第2部　派遣のミサ　（徳島地区）

フリースペース　四国会館2F
（交流・展示・青年バンドステージ）

参加　自由

＊公募＊
「テーマ」　「キャッチフレーズ」にちなんだロゴマークを広く公募致します。子どもからシルバーエイジまで、皆様からの応募作をお待ちしております。スタンプ、ステッカー、缶バッジ等に致します。
締め切り7月31日。

応募先：高松司教館事務局　50周年デスク
760-0074高松市桜町1-8-9
Tel:087-831-6659　Fax:087-833-1484
E-mail: catholic-takamatsu@takamatsu.catholic.ne.jp

11月4日　教区設立50周年記念の集い

高松教区は本年9月に教区設立50周年を迎える。これを記念する取り組みとして司祭評議会と宣教司牧評議会において記念行事開催を決定し、高松教区各地区から司祭・修道者・信徒（大人と青年各1名）を構成メンバーとする準備委員会を立ち上げた。これを含め４事項を決定し実行する。

①「高松教区設立50周年記念感謝と希望の集い」開催。（右掲載プログラム参照ください）

②高松教区50周年記念「小教区巡礼へのお誘い」巡礼手帳配布。

50周年を記念して教区指定巡礼教会を設け、司教座聖堂献堂記念日である8月15日を念頭に、今年8月15日から２０１４年8月15日までの間、普段訪問の機会が少ない他地区小教区を訪問し、祈り、他小教区との融和と親睦を図る契機となることを希望する。

③「高松教区設立50周年へ向けての祈り」配布。

教区設立50周年を機会に教区民一人ひとりが教区の再生と一致の道を歩んでいける恵を共に祈り、これからの高松教区の歩みを支え合うことを祈念する。

④カテドラル案内パンフレット作成

司教座聖堂の歴史及び祭具関係の説明など、未洗者に向けにも分かり易く記す。

尚、記念の集いのプログラム詳細の詰めは全地区からなる上記実行委員会が行う。

信仰年に寄せて⑥

宇和島教会担当司祭　田中正史

信仰をどのように捉えるのかということは、神の恵みをどのように捉えるのかということと密接な関係があります。受け取ることができる「もの」のように考えるのか、あるいは私たちがそれに与る「働き」と捉えるのか。たとえば、弟子たちがイエスに願った信仰のエピソードはこの違いを物語っています。

弟子たちがイエスに「私たちの信仰を増してください」と言ったとき、イエスは「もしあなたがたにからし種一粒ほどの信仰があれば、この桑の木に、『抜け出して海に根を下ろせ』と言っても、言うことを聞くであろう」と答えています（ルカ17・5・6）。たくさんの信仰を求める弟子に対して信仰を「一粒のからし種」にたとえるイエス。この対比は、弟子たちが考える信仰とイエスのそれは性格を異にしていることを指し示しています。

からし種は「人がこれを取って庭に蒔くと成長して木になり、その枝には空の鳥が巣を作る」（ルカ13・18・19）ように、種の中では最も微小であるがその中には成長の確かな働きが隠されていて、種はただその働きに与るだけでひとりでに大きな木になります。種は種そのものの小ささや無力さの中にあってもその中に働く力に身を委ねるだけで成長していきます。だから信仰の種はすでに私たちの中に播かれているのだから、その力が働いていることをただ信じさえすればよいとイエスは弟子たちに諭しているのです。

＊　＊　＊

信仰を神の働きへの参与と最初に明確に捉えたのは聖トマス・アクィナスです。トマスにとって私たちの信仰がそもそも可能となるのは、神が私たちにご自身をお与えになるという根本的な恵み（たとえば十字架上で最期まで自分自身を与え続けた神の子イエスを通して示されたおん父の私たちへの愛）によって私たちが神と一つになり、神の働きに与ることによります。すべての主導権は神が担ってくださっている。トマスは現代の人間中心的な考え方に対して根本的に神中心主義です。私たちの努力さえ神御自身の働きが担ってくださっている。だからどんなに私たちが無力であっても神の働きに照準を合わせるだけで私たちの中には神の力が確実に働いていてくださる。それゆえ、まず私たちが取るべき信仰の態度があります。

信仰は人間のこと、それとも神のこと

聖トマス・アクイナスによる３つの「信じる」について

①Ｃｒｅｄｅｒｅ Ｄｅｏ（神へと信じる）があります。この「へ」という方向性は神の働きへの参与を表しています。おん父が私たちをまず愛し、私たちに並々ならぬ期待を寄せておられる、そのみ心を信じて神と一つになる。ここに私たちの信仰の出発点があります。

そして、このことによって世界は私たちにとって「神のこと」へと変容します。すなわち、神が創られたすべての被造物は神の光の中で「神に属すること」、「神のこと」として浮かび上がってきます。たとえば、人間は創造の始めから高められた存在であり、その中に神の似姿を宿していることを知ります。また、全ての被造物は神に創られたものとして善へと与っていることが明らかになってきます。全てのことは、たとえ悪でさえ神とは決して無関係ではなく、神の救いの対象となっていて、「被造物はすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっています」（ロマ8・22）。ここに世界のあらゆることを「神のこと」として信ずるという信仰の態度が成立し、この信仰が最期に考えなければならないことは歴史という時間の中で生きている私たちの信仰です。私たちの人生はどこに向かっているのか。そして最期にはどうなるのか。ここでトマスは人生の目的、および終極に向かう意志や愛の働きから信仰を考えています。

②Ｃｒｅｄｅｒｅ Ｄｅｕｍ（神のことを信じる）という表現によって表されています。この信仰はすべての被造物の救済に関わっています。

③Ｃｒｅｄｅｒｅ ｉｎ Ｄｅｕｍ（神において信じる）と言われる場合の前置詞「ｉｎ」は、私たちが終極的目的である「神」に向かっていることを表していて、それは端的に「永遠の命」、「完全な正義」、「十全な幸福」すなわち「神の国の完成」を指し示し、それらすべては歴史の終末において完成するという意味において終末論的現実を表していると言えます。

それゆえこの「in」という前置詞はそれに向かう希望、およびそのような終末論的現実が「すでに今／しかしまだ」という時間の緊張関係のなかで実現していることを信じ、さらなる完成に向けて愛によって具体的に神と協働していくことを表しています。

このように考えると、トマスにとって信仰とは、ある特定の宗派における教義内容を信じるという特殊な信仰について論じているのではなく、まさに人間がその存在の極みと心の深みにおいて誰もが普遍的に求めている真実の望みと救いを神御自身が担い実現しようとされている、その働きに人間が心を合わせながら協働する営みといえるのです。

はばたき

夏が来た。今年は６月ころまで、急に冷たい日があったりして天候不順が続いた。やっと夏の風物のトンボたちが川辺を飛び交うのが見られホッとしている。８月にはお盆を迎える。原爆忌、終戦記念日…。日本の夏は平和を願い、鎮魂を祈る季節でもある。

毎夏、暑さとセミしぐれの中を松山市の衣山墓地へお参りに行くと、懐かしい神父様方の墓碑が迎えてくれる。ひたすら信徒たちに寄り添い励まし生涯を終えられた恩人たちだ。『神父様、来ましたよ』と声をかけると、お一人お一人の笑顔が目の前によみがえってくる。

モデスト神父様、ビセンテ神父様、アントニオ神父様、マカリオ神父様、ドミンゴ神父様、マルシャノ神父様、武田神父様、オレンシオ神父様、カルロ神父様、メリーノ神父様…。お名前は書き切れない。

遠き地から宣教の情熱に燃えて日本にやって来られた。日本の戦前戦後の厳しい時代に筆舌に尽くしがたいご苦労をされながらも、四国の地でひたすら神様のみことばを述べ伝え続け、信徒たちを守り導き、そして日本の土になられた。尊いご生涯にはどんな感謝のことばも及ばない。

今、教会は信徒の高齢化が進み、働き手不足の現状の中でも何とか前に向かって進もうとしている。天国の神父様方、どうか私たちを見守ってください。

第２バチカン公会議って何ですか（下）

大きく変わった教会観

カトリック教会にとって大きな転換点となった第二バチカン公会議。その開催五〇周年を記念する「信仰年」にちなんで公会議を振り返るこの連載、前回までに、公会議の第一会期で、二つの勢力の対立が明らかになり、教皇の介入もあって、主導権が教皇庁の保守派から、世界中から集まった司教たちに移ったこと、典礼が自国語に刷新されたことなどを見ました。今回はその対立のひとつの軸となった教会についての教えを、後に公会議で採択された文書『世の光』（教会憲章）に基づいて、見てみましょう。

教会は組織？

公会議以前の時代、神学は教会をいわば「組織」のイメージで語るのが主流でした。この「組織」がどのように始まって、誰が指導していて、どういう役職があって、また誰がどういう権利と義務を持っていて、どういう決まりがあって…という具合です。神が作った組織なので絶対であり、その指導者の権威も絶対的である、というニュアンスも伴いがちでした。神から力と権威を授かった、さまざまな位の聖職者と、それに導かれる一般信徒との身分の違いも強調され、その関係は上下的なものとして規定されました。

法的な教会理解

その背景には一六世紀以来のプロテスタントとの対立もあり、どちらが本物の教会なのか、といった時に、我々は無効だ、といった議論がなされました。つまり、教会のアイデンティティを聖職の有効・無効から考え、また聖職を権利・権威の継承という視点から見る、極めて法的な教会理解です。

このような貧しい教会理解に不満を持ち、もっと聖書や伝統から、深く豊かな理解を導こうとする努力は、公会議よりも何十年も前から、さまざまな神学や運動の中に現れ始めていました。したがって、公会議で従来の教会理解に基づいた文書『教会について』が提出された時、これを支持する保守派と、その教会理解に違和感を抱く多くの司教たちとが衝突したのは、無理からぬことだったのです。

カトリックの聖職者は、秘跡を執り行う権利と権威をキリストから授かった、それは「按手」（頭に手を置く儀式）の継承によってキリストの弟子たちから途切れることなく今の世代まで伝えられてきている、継承の途切れているプロテスタントの聖職

回復された伝統

権利、義務、権威、服従といった法律的・機械的・職務的な観点から教会を描く『教会について』に対し、司教たちによって新しく執筆された『世の光』が示す教会は、私たち一人ひとりが集まって、ひとつの神秘的な「からだ」をなしているとか、神によって集められた、ひとつの「民」であるというような、聖書的・有機的・神秘的なものでした。

それは神から与えられた「権力」や「役職」を通して、教会を階級社会的に理解するのではなく、聖霊によってすべてのものが聖なるものへと変えられていくという遠大な視野のうちに、教会を救いの恵みがあふれ出る泉（キリスト）、しるしとしてとらえる理解、そしてお互いを、洗礼によって同じ使命と尊厳を与えられ、それぞれに違った賜物をいただきながらも、ともに支え合い、困難な現実に満ちたこの世を旅していく同胞として、水平的な関係でとらえる教会理解なのです。

つまり一般信徒は「組織」の下部構成員ではなく、「からだ」の有機的な一部であり、旅する仲間であり、教会そのものである、という洞察です。『世の光』が「聖性への普遍的召命」という言葉で、聖職者や修道者だけでなく、すべての信者がキリストのように聖なる者になるように招かれている、と教えているところにも、その教会観が表れています。

また「キリストの教会＝カトリック教会」ではない、として、他のキリスト教会も救いの計画の一部にあることも述べています。

ここで触れたのは、『世の光』の教えのほんの一部ですが、ともすると、教会を身分社会的に考えがちな私たちはこうした、深い伝統から回復された洞察を大切にしていければと思います。

真生会館機関誌「Ｖａｉｔａｌ」編集長　世古　淳

小教区紹介　三本松教会（香川）

今年もまた当小教区に多くの信徒が集まって、教区行事「ルルド祭」を盛大に祝い、うどん交流会で信徒相互の親睦を深めることが出来ました。

毎年盛大にルルド祭を祝う

三本松教会は、高徳線三本松駅の北西、三本松小学校の北側に在り、献堂当初はほぼ海岸沿いに位置していましたが、現在は近辺に住宅が立ち並び、海岸の開発により港湾施設や企業や公園が整備され、周辺環境も変化しています。

また周辺の変化とともに、小教区としての三本松教会も変化が見えてきています。

その変化は第1に信者、求道者の増加です。ここ2年間、連続で洗礼のお恵みを受け、一昨年度は2名、昨年度は2家族計5名、総計7名の新たな信徒が増えました。

さらにここ数年、信者全員で取り組んでいる、ミサに見えられていない信徒を、電話や訪問しての“お帰りなさい”活動が功を奏し始めました。

長らく見えられてなかった方や、フィリピンから市内の手袋工場に研修に来られている女性の方々もミサに集まって来られるようになり、主日ミサは聖堂の座席がほぼ埋まるまでの賑わいを見せています。

東かがわ市、さぬき市にお住まいの皆様に、進んで集まっていただけるような教会にしたい。

また東讃協力司牧での小教区共同体として活動を続け、キリストの教えを共に学び、カトリックの良さを多くの方々に知らせていきたいと思っています。

三本松教会　長町公司

明るく笑顔が絶えないフィリピーナ

ひと　信仰の模範の“頑張り屋さん”

桜町教会　中川修栄（のぶえ）さん（60歳）

カトリック幼稚園の園長先生を務めている中川修栄さんはいつも、美しい笑顔の先生です。子どもたちには厳しいところもありますが、いつも自分の事より子どもたちの事、同僚のことを第１に心配し、一生懸命に努めています。本当に頑張り屋さんだと思います。

ひとことでは言い尽くせませんが、祈りをとても大切にされる方です。子どもたちにも、よく神様のお話をしたり、修道院の「マリ・ウージェニーと共に歩む集い」にも出来るかぎり参加し、教会での典礼、聖書朗読や答唱詩編先唱の奉仕等には率先して携わり、神様と関わることが大好きな先生です。また本当に几帳面で、真面目一筋、いつも明るく朗らかです。

片付け整理や頓率先してくださり、周りのひとたちは大助かりです。

私たちにとっては大先輩であり、私たちも、そうありたいと思う人です。

会議などの時には、先ず全員の席を確認し、それから自分が最後に席に着くという人です。これからも大好きな子どもたちに囲まれて、周りの人達を神様に近づけることをモットーにお仕事に励んで下さい。

マリア幼稚園　教職員

信仰年によせて　受洗の大きな喜びを伝えながら

教会の門をくぐったのは家からほんの一足のところカトリック桜ノ宮教会でした。そのころの私は20代後半、重度障害という自分の置かれた立場に納得できず、のたうちまわっていたときのこと。半年かけての公教要理の勉強を終え、長崎出身の山口正神父さまの「洗礼を望まれますか？」との質問に「ハイ、でも私は疑い深いので」とうつむく私に、神父さまは聖書の中の疑い深い弟子の個所を聞かせてくださったのでした。

受洗の喜びは大きく、車いすの仲間に声をあげて喜びを伝えたのでした。そうした半面スモッグがたちこめた都会にはなじめず、一人っ子のわがままを押しとおして、四万十川支流の市街地にも近い今の場所に移り住むことになりました。

そのころの中村教会は、くぐり戸を入ると小さい中庭と、４畳半２間の畳敷きのお部屋があり、２メーターに近い長身のオブレート会士ビル・マヘル神父さまが常駐されていました。そしてゴミサ、聖書の講座、英会話と幾多の布教に邁進されていました。

今75歳の私は中村では古参の存在になってしまいました。両親亡きあと20年余りを周りの皆様に助けられながらの一人暮らしですが、この奇跡を思うとき、関わって下さった神父様ほか全てが、大きな神の愛によるものと確信しています。

神に感謝！

中村教会　力丸久子

追記

力丸久子さんは一人で寝起きもできないという方です。でも、ごくわずかに動く右指でパソコンを打ち、電動イスで動きながら、おひとりで暮らしておられます。彼女の忍耐力は私達の想像を絶しています。教会に通えなくても、聖体奉仕者からご聖体を拝領し、多くの友人も彼女に会う度に彼女から元気をもらって帰っています。

神学生便り

聖体訪問を大事に自己養成

神学課3年宋神学生

まず、3月20日に司教様を始め神父様たち、そして信者さんのお祈りのおかげで祭壇奉仕者として選任される恵みを頂きました。心から感謝いたします。

今年の日本カトリック神学院福岡キャンパスでは、3人の神学生が助祭叙階され東京に移動し、東京からは司祭・助祭候補者として認定された高松教区神学生のヨセフさんを含め10人の神学生が福岡に移動して、現在各教区から23人の神学生たちが福岡で一緒に生活しています。

福岡キャンパスでは毎週土・日曜日には福岡教区の小教区に司牧体験として派遣されています。私は太宰府市にある二日市教会に派遣されて平田三好神父様のもとで祭壇奉仕者としてミサの奉仕をし、教会学校で堅信組の子どもたちに要理を教えています。

祭壇奉仕の選任式でも少し申し上げましたように、今年はとくに病者のために心をかけて祈りたいと思っています。そして、聖体を大事にして聖体訪問する時間を増やし、もっと祈りながら自己養成をしたいと思います。

今年は梅雨が早くて長く、福岡も雨が降る日が続いていて、風邪にかかって病院に通ったりする神学生が増えていますが、皆さんもどうか体には気を付けて下さい。そして夏休みに元気で会えるのを楽しみにしています。

最後に、私たち神学生のためにもお祈りをお願いします。私たちも皆さんのためにお祈りしています。

スポーツいのちの神学生たち

西日本司祭交流会

おしとやかシスターもバット振り

愛媛県松山市の重信川河川敷にある球場にひときわ大きな歓声が響いた。前年までとは違いソフトボールでは番外試合がセットされ司教・修道女チームと60代シニア・女性チームが出場しその場の雰囲気を盛り上げた。今年は最強・長崎教区の不参加により、急遽、即席チームの立ち上げとなったからだ。聖ドミニコ宣教修道女会のシスターを含む地元応援団のカラフルな手作りポンポンでの華麗な応援も飛び出し、その場をひときわ盛り上げた。

第10回目の今回は広島・高松教区がホスト役を務めた。日中はソフトボールで汗を流し、夕方からは道後温泉で汗を流した後、和気あいあいの懇親会となり、コミカルな自己紹介やカラオケで盛り上がり、各教区相互のつながりを確認し合った。

初聖体

坂出教会　河上知哉

僕は6月2日に初聖体を受けました。シスターから神様のことや、愛について、許しあうことについて勉強しました。勉強した後は、なんだか心がきれいになったようでした。　初めてのご聖体は神父様と半分ずつで大きくてびっくりしました。「神様、来てくれてありがとう。」これからもっともっときれいな心でいられるように頑張ります。

高松空襲の跡を訪ねて考える
『今 平和を感じられますか』
高松教区人権を考える委員会　委員　尾崎寿一

高松教区人権を考える委員会は、日本カトリック正義と平和協議会（正平協）との共催で、平和の実現のために何が出来るか、という事を考える第一歩として、5月25日（土）高松空襲の跡を訪ねて過去の戦争の悲惨さ、酷さから平和の大切さを学ぶスタディツアーを開催した。

語り部 喜田清氏に聞き入る

高松教区の各県から諏訪司教様を始め27名、正平協から1名、兵庫県からシスターを含めて2名、合計30名の参加があった。

先ず番町教会で、語り部の喜田さんと岡田さんが持って来られた焼夷弾（しょういだん）や防空頭巾、防火バケツなどの実物を見せられ、それを使いながら空襲当時の状況の説明がなされた。

続いて、残されていた高松空襲の手記が小学校6年生の川西まゆか、ふうかさん姉妹によって朗読された。その手記には、家族が死に、負傷し、離れ離れになった上に家も焼かれて何も残っていない悲惨な状況が再現されていて、その不条理さに憤りを覚えずにはいられなかった。またその恐ろしい情景は東日本大震災とも重なるものだった。

その後、5カ所の空襲跡を訪ね、それぞれの場所で当時の状況の説明を受けた。

霊源寺近くの六角堂には、高松空襲を語り継ぐ会のメンバーが空襲を受けて亡くなった1359名を正確に調べ上げて、沖縄の「平和の礎」のように全員の名前が刻まれた慰霊碑が建立されていた。

午後から、桜町教会で振り返りが行われた。

「今の平和は、戦争で犠牲になった人々の苦しみの上に築かれたものであることを心に留めよう」「戦前は人より国が大切という教育であり、現在のように個人の自由が認められる社会ではなかった」「強い国を目指そうとしている政府と、キリスト者は反対の立場にある。人間としてキリストが私達に関わってくださったように、私達も一人ひとりに大切な人として関わり、みんなが幸福な社会を築いていかなければならない」「平和のために、一人ひとりが何かをする責任を負っている。一人の力は小さいが、多くの人の力を合わせれば大きな力になる」など、参加者全員から戦争のない平和な社会を護っていこうとする力強い発言がたくさんあった。

語り部たちは自分たちの後を継いで、語り続けてくれる人を切に求められていた。

戦争が平和とは対極にあることは、戦争を体験した人にしか分からない。だから自分たちが戦争の悲惨さを伝えなければ、戦争の苦しみを知らない世代は平和の尊さには気付かないし、平和を守っていくことも難しいのではないかと危惧されていた。

「戦争の体験が風化しつつある今、強い国を目指そうとしている政府は少しずつ戦争を容認する方向へと向きを変えつつあるのではないか。だからこそ、80歳の高齢になっても後継者が出来るまで辞めるわけにはいかないのです」と言われた言葉が忘れられない。

六角堂慰霊碑の前で

私達はスタディツアーの体験を基に、聖書にあるように、「平和を実現する人々は幸い」というキリストの御言葉をしっかりと心に刻み、平和の実現に向けて次のステップへと踏み出さなければならない。

振り返りの後、地下聖堂でローソクの灯を囲んでテゼの祈りで平和の尊さを黙想し、スタディツアーを終えた。

故田中英吉司教を偲ぶ会
桜町教会　細谷正高

5月20日、高松桜町司教座聖堂で高松教区初代教区長・フランシスコ・ザビエル田中英吉司教の命日30周年追悼ミサ、つづいて高松市郊外の「郷屋敷」で偲ぶ会が行われた。

折しも今年は教区設立50周年に当たり、初代教区長・田中英吉司教を記念して、戦前、戦後の苦難の道を歩まれた故人の遺徳と教区の足跡を顧みることは、まことに意義深いことと思う。

30周年追悼ミサは、田中健一京都教区名誉司教（故人の甥）の主司式のもと、溝部脩高松教区名誉司教、村上康助高松教区司教総代理、レナト・フィリピーニ師・松永洋司師・デシデリオ・カンバラ師の6人の共同司式で進められ、親族、信徒多数が参列した。

はじめに、田中健一名誉司教より挨拶があり、田中英吉司教の生い立ち、四国知牧区の教区長代理としての活躍、高松司教区の初代教区長としての叙階など、故人のプロフィールと教区発展の主だった足跡についての紹介があった。

故田中英吉司教を知る信徒たちと

紹介のおわりに田中健一名誉司教は、高松教区設立50周年の意義深い記念の年に田中英吉司教のために、没後30周年の追悼ミサを捧げていただくことは本当に幸せなことであり、私も参列させていただき心から感謝している、と述べ話を終えられた。

三波春夫を好む
懇親会で思い出語る

追悼ミサの後、高松市の郊外にあるうどん料理の老舗、「郷屋敷」で、名誉司教、司祭、親族の方々と信徒の有志が参加して、会食と偲ぶ会が行われた。

瀬戸内の新鮮な魚と本場のうどん料理を頂きながら、英吉老司教の思い出やエピソードが、生前、関わりの深かった親族、シスター、信徒の方々から、和やかな雰囲気のうちに語られ、故人を偲ぶにふさわしい集いになった。

特に、当日配られた昭和52年3月1日発行の「カトリック・グラフ77」（復活祭合併号）のコラムは、老司教のプロフィル・人物寸評としては、誠によく出来ていると思われるので、最期に記事を抜粋して紹介したい。

・彼は、三波春夫を好んだ。「国民的歌手」と呼ばれる三波を羨ましいといった。国民の心を啓発すべき任を負うものとして、三波から学ぶものは多い、とも。

・彼は、しばしば自分の顔を、ライオンにたとえた。とっつきにくく、こわもてのする面相ではあった。しかし眼差しの何と優しいことか。その笑顔は、雅気にあふれ、穢れのない童子を想わせる。人はみな、その顔ゆえに彼を愛した。

・私の出る幕ではない、といいながら、彼は気軽に腰を上げた。ヨーロッパへ、南米へ、豪州へ、実に足まめであった。長らく移住問題に関して、「長」の席にあるのも、ゆえないことではない。

臨時に設けられた祭壇を囲んでのミサ

・ブラジルでは、小野田寛郎と意気投合し、とりあえず嫁さんを励ましてきた、という。彼に国境はなく、厚い扉も画すべき一線もなかった。

・ホーム・グラウンドでも、彼は「司教位」を大衆レベルへ引き戻そうと心がけた。早朝の道路清掃や市民との立ち話はその一例に過ぎぬ。

・その彼が倒れた。激動期を大衆とともに生き、悩み、謳歌した男が、清々しさを残して、いま退く。

私はこれを機に、今後、100周年を目指し、教区が一体となって「一致と再生」・「新しい福音宣教」に取り組み、自己変革しなければならないと痛感した。

田中健一司教が語る
英吉司教の足跡

故田中英吉司教は、明治35年（1902年）6月6日、愛媛県宇和島市戸島で生まれ、大正12年（1923年）、故人の実兄である哲太郎氏の影響を受けて受洗した。旧制高知高校理科をおえて長崎医大に進み、在学中、召命を感じ、東京カトリック大神学校に入学。1年後の昭和5年（1930年）の秋にイタリアに留学。昭和10年（1935年）ローマのラテラノ大聖堂で司祭に叙階された。

その翌年の1936年に日本郵船の香取丸で神戸に帰国した。当時、田中健一司教は9歳だったが、父親と二人で神父を神戸に出迎え、四国へは大阪商船のすみれ丸で今治まで行き、そこからは、各駅停車の汽車とバスを乗り継いで、やっと宇和島に着いた。宇和島教会で日曜日のミサを捧げ、ミサ後、教会の裏庭にある幼稚園の運動場で信者全員と田中英吉神父帰朝の記念写真を撮った。

新本町（江ノ口）教会
私財で建立

何時のことか分らないが、父田中哲太郎は弟田中英吉神父と財産分けを行った。

国鉄高知駅の裏に広い土地を購入し、その半分に新本町教会、俗に言う江ノ口教会と司祭館を建て、残りの半分に聖心愛子会（聖心の姉妹会）のシスターを呼んで児童施設、保育園、ベビーホームを開いた。

四国知牧区には、当時、高松、徳島、松山、高知、今治、宇和島の6教会があったが、いずれも太平洋戦争中，B29の空襲で焼失した。四国全土を受け持っていたドミニコ会の司祭たちの教会再建の苦労は、並大抵のものではなかった。

昭和11年（1936年）から昭和27年（1952年）の間、四国は、ドミニコ会の司祭たちとただ一人の邦人教区司祭という体制で、お互いに協力し合いながら、英吉神父は新本町、高知、徳島、高松番町を受け持っていた。

新本町教会と呼ばれし当時

昭和28年（1953年）には、スペインのブルゴス外国宣教会の司祭が若干名香川県の西部に赴任し、つづいて昭和43年（1968年）には、アメリカのオブレート会の司祭が若干名赴任し、高知県と徳島県を担当した。こうした応援と協力のおかげで、その後、四国知牧区は充実していった。

田中英吉師は、昭和16年（1941年）から昭和38年（1963年）までの22年間、四国の教区長代理を務め、大阪司教・四国教区長の田口芳五郎師を補佐して東奔西走し、懸命に宣教司牧に当たった。

また、昭和24年（1949年）から昭和38年（1963年）まで高松市の番町と桜町に居を置き、この機会に高松の多くの信者の方々と知り合いになった。1952年に田中健一師が司祭になってローマへ派遣される前に、田中英吉師に連れられて今の桜町教会、聖母幼稚園の敷地がまだ田んぼだったのを見に行ったが、彼はそのとき、ここが将来四国の教区の中心となることを予見していたようであった。

彼は、市民や社会との繋がりを大切にして宣教司牧に当たられたが、刑務所の教誨師や県立香川高校のスペイン語の非常勤講師、また、ロータリークラブのメンバーとしても多くの社会人と交流した。

昭和38年（1963年）10月20日には、ローマのサンピエトロ大聖堂でパウロ6世教皇により司教に叙階され、四国知牧区は高松司教区に昇格した。

その後、昭和38年（1963年）から昭和40年（1965年）までの間、第2バチカン公会議の後期に参加、昭和47年（1972年）から昭和52年（1977年）の間は、日本司教協議会の海外移住者担当となり南米のブラジルを訪問した。この頃が最も幅広く活躍した時期で、一番の花の時だった。

昭和52年（1977年）2月2日、病気のため高松司教を引退し、聖マルチン病院に入院した。入院生活6年間の後、昭和58年（1983年）5月20日に召天された。享年81歳であった。

ちょっと　ひといき

詩　み心を思うと

イエズス様のみ心を思うと
いつも涙が出てくる
この私のような者にさえ
青い御目にいっぱい慈愛を
浮かべ見つめていて下さる

イエズス様の御心を思うと
どんな人でも
許さなくてはならないと思う
良いことをした者のために
にっこりなさる
どんな罪でも溶かしてしまう
イエズス様の笑顔が見たいから・・

医療のともしび (38)

日本カトリック医師会について

本欄で執筆しているのは、主に日本カトリック医師会高松支部のメンバーです。今回はこの医師会について書きます。

JCMA（The Japan Catholic Medical Association）と略します。この会に参加しているのは医師または歯科医師で、カトリック信者であり、会則に賛同した方が参加しています。年間の事業としては世界的には各国のカトリック医師会との連絡や行事への参加があり、近年アジアカトリック医師会開催を日本カトリック医師会において行うことが決定され準備中です。国内においては学生向けのセミナー開催（カトリック医療関連学生セミナー）、医師会誌発行、看護や介護施設との共働するための会議（カトリック医療団体協議会）参加、カリタスジャパンへの寄付などを行っています。ボランテイア活動としてはフィリピンにおける医療奉仕活動を年１回行い、東チモールやベトナムへの視察も行っています。

インターネットでは 以下のアドレスにホームページがありますので、ご覧いただくと幸いです。

（http://www.j-cma.com/index.html）

全国に２０の支部があります。そこでは 支部独自の活動があります。高齢司祭の健康問題への取り組みや、外国人居住者の検診に取り組んでいるところもあります。高松支部では この医療のともしびを執筆することが主な取り組みであり、医療の抱えるよい点、問題点などを発信し、高松支部の信者に役立つようにしています。

JCMAにも改善するべき点があります。一つに上記活動の資金源は、会員の納める年会費しかありません。その会員数が減少してきています。１９９０年前半には８００台後半の会員数が現在は６００を割る状態になっています。会員の高齢化が進み、若い会員の相対的減少が見られます。（現在６０歳以上の会員の占める割合は全体の６１％です。）会の存続 発展のために、新しい会員を全年齢層にわたって増やしていくことが重要です。この記事を読んで、私も参加したいと思われたり、家族に対象者がいて、声掛けしてみてもいいと思われるかたはぜひお力をお貸しいただけますようにお願い致します。

疑問点を含めた連絡先は以下にお願いできたら幸いです。皆様のご協力をぜひお願い致します。

〒762-0033　香川県坂出市谷町1丁目
４番１３号 坂出聖マルチン病院 医局
または メールアドレス　martin@mail.kbn.ne.jp
坂出聖マルチン病院 整形外科 田賀谷健一

教区スケジュール

7月
1日（月）福者ペトロ岐部と187福者殉教者（記）
3日（水）聖トマ使徒（祝）
7日（日）年間第14主日　結城了雪祭in阿南
14日（日）年間第15主日　高山右近祭in小豆島
15日（月）聖ボナヴェントゥーラ司教教会博士（記）海の日
20日（土）宣教司牧評議会役員会13:00
21日（日）年間第16主日
25日（木）聖ヤコブ使徒（祝）
26日（金）聖ヨアキムと聖アンナ（記）
28日（日）年間第17主日
29日（月）聖マルタ（記）
31日（水）聖イグナチオ（ロヨラ）司祭（記）

8月
4日（日）年間第18主日
6日（火）主の変容（祝）広島平和記念日
8日（木）聖ドミニコ司祭（記）
11日（日）年間第19主日
14日（水）聖マキシミリアノ・マリア・コルベ司祭殉教者（記）
15日（木）聖母被昇天祭
18日（日）年間第20主日
21日（水）聖ピオ10世教皇（記）
22日（木）天の元后聖マリア（記）
24日（土）聖バルトロマイ使徒（祝）
25日（日）年間第21主日
27日（火）聖モニカ（記）佐々木光雄師命日
28日（水）聖アウグスチヌス司教教会博士（記）
29日（木）洗礼者ヨハネの殉教（記）

新刊書籍介

■　十字を切る

さあ、十字を切りましょう。

クリスチャンが、「父と子と聖霊のみ名によって。アーメン」と、わが身に刻む十字のしるし。 あなたを救う、最短最強の祈りのすべてを解き明かす。

十字の祈りとは　十字の切り方　十字を切るのはこんなとき　生まれて初めて切るとき　祈りの前後に付け加えるとき　ミサのとき　聖堂に入るとき、出るとき　起きたとき、寝るとき　食事のとき　車に乗るとき　仕事のとき　試合や試験、本番のとき　感動のとき　気持ちを切り替えるとき　病気のとき　苦しいとき、死にたいとき　生涯の最後のとき　「父と」・親の愛によって子を生む天の父「子と」・親の愛によって生まれた神の子「聖霊の」・親子を結ぶ親心「み名によって」・父と子と聖霊の交わりに入る「アーメン」・まことの親への全面的な同意　十字架と復活　今ここを天国に

定価：1,365円（税込）
著者：晴佐久昌英
四六判並製
218ページ
発行：サンパウロ

若い力

鳴門教会・鳴門聖母幼稚園
信じてよかった生まれて良かった
第25回「子ども&中高生の集い」

4月13日から14日にかけて、毎春恒例の教区主催、子ども&中高生の集いの第25回が「信じてよかった！生まれてよかった！」をテーマに、徳島地区の鳴門教会と鳴門聖母幼稚園で開催されました。当日早朝に、淡路島を震源とする地震が発生しましたが、会場では特に問題も無く無事開催されました。

受付を終了し、幼稚園2階ホールでのオリエンテーション、参加者全員での交流ゲームの後、諏訪司教様からのお話があり、司教様ご自身が滋賀県の琵琶湖畔に子ども達をキャンプに連れて行った経験を基に、神様の存在についてのお話をしてくださいました。その後六つの班に分かれてのグループワークとして、主に紙で舞台や人形を作り演じるペープサートを作成しました。演目は「コルベ神父様」「ありの街のマリア」「ドン・ボスコ」「マザー・テレサ」「永井隆博士」「ドロ神父様」です。それぞれの班で配役、台本の作成、演目の内容の打ち合わせなどをしました。その後夕食となり、鳴門教会の女性信徒の皆様のご協力で、みんなでカレーライスを食べました。夕食後はまず、林神父様が、学校内でのいじめを題材にしてのお話をしてくださいました。それぞれの登場人物の子の意見を挙げて、どういうものがいじめになっていくのか、またそれを防ぐにはどうしたらよいのかを、みんなで考えました。そしていよいよ、人形や小道具、台本の製作に取りかかりました。その後、聖堂でのテゼの形式を用いた夜の祈りを捧げました。そしてみんなで協力してそれぞれの部屋へ布団を運び小学生はそのまま就寝し、中高生は語り合いの後、就寝となりました。

子どもたちの心を掴むMr.ジェイコブ

二日目は日曜日でした。起床後、聖堂での朝の祈り、布団の片付け、朝食を済ませ、それぞれ昼からのペープサート上演にむけて人形、小道具、脚本を仕上げました。その後鳴門市内の体育館へ移動してスポーツレクリエーションで汗を流し、教会に戻った後、発表の稽古に入りました。

昼食の後いよいよ各班の発表です。それぞれ力の入った人形使いで感動し、また楽しませてくれました。発表の後は聖堂にて鳴門教会の信者の皆様とともにそれぞれの演目で取り上げた方たちを思いながらミサに参加しました。演じた中で子どもたちもそれぞれに何かを感じ取ったのではないでしょうか。

最後に、この集まりのためにご尽力くださった、特に乾神父様と鳴門教会の信徒の皆様方、そして司会進行を担当してくださいました、ジョン・ジェイコブセンさんと徳島地区の信徒の皆様、ありがとうございました。

三本松教会　長町公司

一堂に会し聖歌で賛美

諏訪榮治郎司教叙階２周年を祝う

6月16日午前、諏訪榮治郎司教の司教叙階を記念し、今回で4回目となる「聖歌合戦」、午後には司教叙階記念ミサが執り行われた。

聖歌合戦にはこれまでの常連チームの不参加もあったが、当日9時に即席結成された9時の会チームのエントリーもあり、会場を盛り上げた。昨年参加できなかった道後のアンサンブル・ユビラーテは今年も澄んだ歌声で教会音楽を披露した。

各チーム、持てる力を出し切っての演奏とあって、審査委員長を務めた諏訪榮治郎司教も予め自ら準備した採点表を真剣にチェックしながら講評を交えた。

歌に躍動感を吹き込むSCCFC
(Sakuramachi Catholic Church Filipino Community)

審査の結果、フィリピーナたちが結成しているＳＣＣＦＣチームの踊りと笑顔から発せられる賛美の歌声に、最優秀賞と司教杯が送られた。他３チームには元気・歌声・チーム賞をそれぞれ授与し、アンサンブル・ユビラーテによるアンコールのハーモニーへの鳴り止まぬ拍手に包まれた後、東日本大震災犠牲者を追悼する「いつくしみふかき」を参加者全員で唱歌し幕を閉じた。

諏訪司教 司教叙階２周年記念ミサ

続く午後2時からは司教司式による共同司式英語ミサが捧げられ、これまでの諏訪司教による教区司牧への感謝とこれからの司教と教区民の上に神の祝福を願い祈った。

告　知　板

黙想会のお知らせ

テーマ：「耳を傾けて」

期　日：13年7月13日(土)～15日(月)
場　所：長崎　立山黙想の家
対　象：高校生～40代までの若い男女
申込先：　TEL(095)821-4577
　　FAX(095)821-4585
メール:ret-nagasaki@dream.ocn.ne.jp

主　催：イエズス会・マリア会・パウロ会
　　お告げのマリア会・カノッサ会
　　コングレガシオン・ド・ノートルダム修道会

本紙への広告掲載を募集しています。

皆様のご協力を宜しくお願い致します！

教区広報委員会

編集後記

慌てて入った梅雨も一向に雨も降らず、空を見上げては雨粒に恋焦がれていた矢先、ちょうどいい塩梅の雨に恵まれた。

信仰年も半年を切ったが、教区が発行した「小教区巡礼へのお誘い」を活用しての全免償の恵みを受ける巡礼を是非お勧めしたい。

高松教区は設立50周年を迎える。単なるお祭りとはならないよう信仰年に相応しい教区の在り方を模索してきた。同時に信者一人ひとりが自らの信仰を振り返る機会を共にしながら11月の50周年記念にも備えたい（Ｊ）

聖ドミニコ宣教修道女会

医療法人社団聖心会　阪本病院

わたしたちは、患者様の立場に立った全人医療を行い、地域の皆様に愛され信頼される病院を目指します

院内保育園完備

整形外科・脳神経外科・泌尿器科
皮膚科・外科・消化器外科
肛門外科・乳腺外科・形成外科
呼吸器外科・呼吸器内科・内科
リウマチ科・放射線科・リハビリテーション科・麻酔科
〒769-2602
香川県東かがわ市川東103-1
☎0879-25-1121（代）
http://www.sakamoto-hosp.or.jp/

私たちは、自分を創造しようとするこどもをまなび、護りましょう

暁の星学園

鳴門聖母幼稚園　高知聖母幼稚園
阿南聖母幼稚園　海の星幼稚園